

平成24年度 長崎市提案型協働事業 中間報告会・2次審査会 結果一覧

		中間報告（審査対象外）	中間報告（継続審査）	2次審査				
種別		市民提案型	市民提案型	種別	行政提案型	市民提案型	市民提案型	市民提案型
団体名		NPO法人 新現役の会長崎センター	トムテのおもちゃ箱	団体名	財団法人 ながさき地域政策研究所	現川川をきれいに しよう会	特定非営利活動法人 市民後見人の会・ながさき	長崎史談会
担当課		市民協働推進室	子育て支援課	担当課	健康づくり課	農林整備課	高齢者すこやか支援課	観光政策課
事業名		団塊シニア世代セカンド デビュー応援事業	地域のおもちゃ箱発掘事 業	事業名	慢性腎臓病（CKD）予防 普及啓発事業	現川町地域の活性化に向 けた美化推進事業	市民後見人候補者養成およ び成年後見制度普及事業	まちなか魅力新発見事業
事業費総額（円）		1,420,000	665,000	事業費総額（円）	1,944,000	406,000	980,000	1,000,000
（市負担額）		1,420,000	528,000	（市負担額）	1,944,000	406,000	784,000	800,000
審査項目	配点	各審査項目における平均点		審査項目	配点	各審査項目における平均点		
① 協働のプロセス	15		12.0	① 事業の目的	10	7.2	8.4	8.0
② 目的・目標の達成度	10		8.8	② 事業の実現性	15	10.8	12.6	11.4
③ 市民の満足度	5		3.8	③ 協働の役割分担	5	3.0	3.8	3.6
④ 協働の相乗効果	10		7.6	④ 協働による効果	15	10.8	11.4	12.0
⑤ 事業の継続性	10		9.2	⑤ 費用の妥当性	5	3.2	4.0	4.0
合計点（点）	50		41.4	合計点（点）	50	35.0	40.2	39.0
得点率（％）	100		82.8	得点率（％）	100	70.0	80.4	78.0
審査結果		対象外	採択	審査結果	採択	採択	採択	採択
審査会コメント		重要な地域課題に対し、団体と行政が目的を共有して事業に取り組んでいることが伝わっており、また成果物としての冊子もいいものできていると思う。また、当初の予定になかった『ながさきダンカース倶楽部』という団塊シニア世代のプラットホームを立ち上げるなど、新たな展開につながっていることも評価できる。現時点では、団塊シニア世代がセカンドデビューすることがメインとなっているが、次のステップとして、デビューの仕方まで取り上げ、他の市民活動団体、企業などを巻き込むことも検討していただきたい。さらなる活動の充実に期待する。	重要な地域課題に取り組んでおり、事業の必要性を十分に感じる。団体のノウハウについても、あまり意識が高くない参加者を、講座を受けていく中で、意識を高く持つように変えているなど評価できる。2年目の新たな展開として、地域とのつながりについても計画されているようなので、新たなネットワークが広がっていくことにも期待したい。また、事業を協働で行う上で、1年目が出てきた反省点を踏まえ、お互いの役割分担を明確にし、しっかり事業展開してほしい。	審査会コメント	慢性腎臓病の普及啓発の重要性については共感できる。単なるツール制作の委託事業と誤解を受けないよう、事業のターゲットとなる世代に対して、お互いのネットワークを生かした意見交換会をしつかり行い、市民の意見を取り入れたツールの開発を行うだけでなく、慢性腎臓病の普及啓発に努めてほしい。お互いの強みをいかした役割分担で事業に臨むことを期待する。	自分たちの地域は自分たちで創るということは、市民力の基本であり、事業の目的などは共感できる。また、協働で実施することで事業費の削減につながることも評価できる。ただ、どこの地域も高齢化が進み、担い手不足だという現状を考えると、団体の継続性について心配な部分もある。今回の事業はモデル的に実施するというところであるが、成功した場合の成果だけを見て広めていくのではなく、事業を実施した背景、地域等しっかり検証した上で広めていくようにしてほしい。	市民後見人候補者を養成する意義や必要性については、十分共感できる。この事業に関しては、講座受講後に受講者が市民後見人につながっていくことが重要となるため、その点に関しては検討会等で十分に議論して進めていってほしい。成年後見制度については、まだ試行錯誤の段階だと思うので、団体、担当課だけでなく、関係機関と連携を取りながらやって欲しい。	地域の貴重な歴史的情報をなくさないためにヒアリング調査を行い、データベース化していくことについては必要性を感じる。今回の事業で得られるデータについては、観光施策に限らず、様々なものに活用することで、地域課題の解決につなげてほしい。成果物の1つである冊子については、団体と担当課だけでなく、読み手の視点も入れることでよりわかりやすいものになると思われるので、検討していただきたい。